

JOMF 派遣医師便り (2015. 1)

◆ジャカルタ◆

腸重積

JJC 医療相談室

原 稔

腸重積は小児科領域で急を要する疾患のひとつです。腸管の一部の口に近い側が、肛門に近い側にはまり込んで起こります。一番多いのは小腸の終わりの部分が大腸の中に入っていくパターンです。時間が経過すると病変部位は血流が悪くなり、組織が壊死してしまうことがあります。

早期に診断して対応すれば、肛門から食塩水などを注入することにより、はまり込んだ腸管を元に戻すことができます。戻らない場合は手術が必要です。

3歳以下の子供に多いのですが、時にそれより年長の児にも起こります。腸重積を起こすと、子供は不機嫌になったり激しく泣いたりします。2歳くらいの子であれば、腹痛を訴えるでしょう。赤ちゃんの場合はお腹が痛いと言えないので、「不機嫌」とか「泣く」とかいった症状を表すのです。これは突然起こります。そして、少しすると収まります。20分程度の間隔で症状が周期的に現れます。症状がないときは、何事もなかったかのようにけろっとしています。元気に走り回る子もいます。

間欠的にお腹を痛がったり泣いたりを繰り返し、その合間はけろっとしているのがこの病気の特徴なのですが、ここが落とし穴でもあります。診察室で元気になっている場合、見過ごされることも考えられます。特に海外で受診する場合は、言葉の関係で症状がうまく伝わらない可能性があります。

お母さんがこの病気のことを知っていれば、「腸重積は？」と積極的に伝え、リスクを軽減できます。インドネシアでは“invaginasi”で通じます。英語は“invagination”です。意思疎通が怪しければ、書いて伝えれば確実でしょう。

繰り返します。初期の特徴は、突然発症する周期的な腹痛や号泣で、その合間は比較的元気なことです。怪しいと感じた時は早く受診してください。